

研 究

母子の共同注意と子どもの情動調整

東谷知佐子¹⁾, 大藪 泰²⁾

〔論文要旨〕

子どもが養育者や外界との関わりを作っていく際のメカニズムについて検討するため、言語的シンボルを用いた視覚的共同注意場面における子どもの情動調整行動を分析した。養育者の関わりが一時的に阻害される場面を含む5つの連続場面での生後15~21か月児34名の行動を分析した結果、子どもらはネガティブな情動を表出したもの(PN群)と、しなかったもの(PO群)に分けられた。これまで「静止した顔」研究では養育者の関わりの阻害場面だけでなく回復場面でもネガティブな情動が表出される「持ち越し効果」が知られているが、同様の情動変化がPN群で認められた。またPN群はアタッチメント・タイプにおけるアンビパレント群との、PO群は回避群との類似性が、それぞれ推察された。

Key words : 共同注意, 情動調整, 子ども—養育者相互作用, アタッチメント

I. 緒 言

共同注意の発達と情動調整

生後1年を迎える頃、子どもは養育者との関わりを通じて、外界の事物に注意を向けはじめる。それまでの「乳児—他者」という二項的やり取りが、次第に「乳児—対象物—他者」という三項的な社会相互交渉へと変化していくのである。この二者による対象物への注意の共有が、共同注意(joint attention)と呼ばれる現象である。

近年、共同注意の出現は子どもの発達における重要な転換点として注目されている。なぜなら、他者が注意を向けている対象物に自分も注意を向けたり、自分が注意を向けている対象物へ他者の注意を向けさせたりといった共同注意行動の背後には、他者を意図をもった主体ととらえる心の働きがあると考えられるからである³⁾。子どもは、周囲の大人、特に養育者との

間で、共同注意という社会的交流を経験することにより、目の前にある具体的な対象物だけでなく、それらを表象するシンボル、特に言葉を共有し、やがてそれらを使って抽象的な意味世界を共有する地点にまで到達するのである²⁾³⁾。

共同注意の発達は、いくつかの段階として理解できる。Butterworth¹⁾は、子どもの視覚的共同注意行動が生後6~18か月の間に3つの異なるメカニズムを取って発現するとした。またAdamson²⁾は、共同注意の発達の变化を4つの段階として論じた。さらに大藪³⁾は、「乳児—他者」という二項場面に共同注意の萌芽的形態を認め、「前共同注意」、「対面的共同注意」、「支持的共同注意」、「意図共有的共同注意」、「シンボル共有的共同注意」の5種類の共同注意階層を提案している。

これまで共同注意の発達は、視覚的共同注意を中心に、主として認知的発達の観点から論じられてきた³⁾。しかし、子どもの共同注意は情

Caretaker-Infant Joint Attention and Emotion Regulation

[1708]

Chisako HIGASHITANI, Yasushi OYABU

受付 05. 3.16

1) 早稲田大学大学院文学研究科(博士後期課程)

採用 05. 8.24

2) 早稲田大学文学学術院(教授・発達心理学)

別刷請求先: 東谷知佐子 早稲田大学大学院文学研究科(博士後期課程)心理学専攻(発達心理学)

〒180-0001 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-7-15

Tel/Fax : 0422-56-0447

動とも密接な関係にあることが推測できる。なぜなら、情動は単に個人内で生じるプロセスではなく、対人間で相互に調整し合う現象であり⁴⁾、共同注意場面とはまさにそうした相互作用場面にほかならないからである。共同注意と情動との関連に焦点をあてた実証的研究は、これまでのところ決して多くはない⁵⁾。しかしながら、これまで子どもの認知—社会的発達という観点から論じられてきたいくつかのテーマを、情動発達という観点から検討しなおすことは可能だと考えられる。その例として、次に説明する対面的共同注意場面における「静止した顔」パラダイム、および、意図共有的共同注意場面における「社会的参照」パラダイムをあげることができる⁶⁾。

生後2か月頃出現する「対面的共同注意」³⁾、すなわち乳児と養育者が対面し関わりあう場面では、豊かな情動表出が見られる。通常の社会的相互作用の進行が阻止される「静止した顔」のパラダイムは、対面的共同注意場面において、乳児のもつ情動調整能力をとらえるよう工夫された場面である。この実験では、人為的に、養育者が静止した無表情な顔で乳児に向かい合う場面を作り出す。多くの場合、「相互作用場面—静止した顔—相互作用場面」という3つの連続する場面での乳児の行動を記録し、それらが系統的に比較検討される。これまでの知見では、乳児は養育者の静止した顔をすばやく検出し、情動表出の仕方や注意を変化させることによって情動調整を行っていることが知られている^{2)7)~10)}。

また、生後9か月にさしかかる頃、乳児は対象物と他者との間で注意を能動的に配分しはじめる。この「意図共有的共同注意」³⁾場面における子どもの情動調整の研究として、「社会的参照」パラダイムがよく知られている。「社会的参照」の実験では、9~18か月程度の子どもの新奇な場面に置く方法が用いられる。子どもは馴染みのない対象物、たとえば見知らぬ大人や玩具、あるいは視覚的断崖に直面させられると、そうした対象物を見ている大人を注視し、対象物に関する情報を得て（参照視）、その情報を反映する行動を取り（行動調整）、自分自身の情動を変化させる（情動調整）ことが知ら

れている⁶⁾。

さらに、この年齢期は、情動発達において重要な段階にさしかかる時期でもある。養育者との情動的な絆を獲得した子どもは、養育者を「安全基地」としながら外界を探索し始めるのであり¹¹⁾、その行動には、「アタッチメント・タイプ」と呼ばれるいくつかの型があることが指摘されている¹²⁾。また、この年齢期において、自立歩行により生活空間を広げた子どもは、養育者から離れることに対する不安も抱く。いわゆる「再接近期」¹³⁾である。すでに指摘したように、意図共有的共同注意の能力を獲得した子どもは、能動的に周囲の事物を探索しながら、養育者の存在やその振る舞いに絶えず気を配っている。そこでは養育者と子どもとの関係性が子どもの精神的安定感の確保に重要な役割を演じていると考えられる。

本研究の目的

子どもの情動調整に関しては、対面的共同注意期には「静止した顔」パラダイムが、また意図共有的共同注意期では「社会的参照」パラダイムが使用されてきた。しかし、言語が獲得され始めた後の年齢期、すなわち生後1年目の中頃以降に現れるとされるシンボル共有的共同注意期における子どもの情動調整については、実証的データは少ない。とりわけ、「静止した顔」パラダイムのような場面操作を用いた研究は、ほとんど存在しないといってよい。他者の意図理解能力やシンボルを獲得し始めた子どもについても、「静止した顔」パラダイムと同様の「相互作用場面—関わりへの阻害—相互作用場面」という場面操作は、子どもの情動調整能力の測定に有効であると考えられる。

本研究の目的は、18か月頃の子どもと養育者を対象とし、共同注意の実験場面で母親からの関わりを人為的に一時阻害した場合の子どもの情動調整行動を観察することである。

Ⅱ. 方法

対象

東京近郊在住の生後15~21か月の乳幼児とその母親、計34組。対象者は、東京都内の保育園や子ども関連施設に配布されたポスターやパン

フレットを見て参加を希望した母親と、その子どもであった。研究に先立ち、研究者は研究の内容や公表の仕方を母親に説明し、権利と義務を明記した「合意書」をとりかわした。また、子どもらに対して津守式発達検査を行った結果、本研究の対象となった全員について、発達上の問題は認められないことが確認された。

場 所

早稲田大学文学部発達心理学研究室プレイルーム（約5×4.3m）。プレイルーム内の1つの棚（高さ90cm）の上にバスケットを置き、その中に「鯨の縫いぐるみ」を入れた。実験者に

よって操作できるよう、釣り糸を「鯨」の背中にとりつけ、壁の穴を通して隣接する観察室内まで延ばしておいた。

手続き

観察場面として、連続する5つの場面を用意した（表1）。まず、母親と子どもに自由に遊んでもらい（第1場面/FP；Free Play）、2分後、観察室にいる実験者が糸を引いて「鯨」を出現させた。その後、子どもが「鯨」に気づいても母親は気づかないふりをし（第2場面/IG；Mother Affects Ignorance）、30秒後、実験者が、あらかじめ母親に渡しておいたバイブレータを

表1 5つの観察場面

場面	時間	内 容	
第1場面	約2分間	自由遊び場面 (FP；Free Play) プレイルーム内で母子が自由に遊ぶ	
		2分経過後、観察室にいる実験者は、子どもがバスケットのほうを見ていない瞬間をみはからって釣り糸を引き、「鯨」をバスケットの上へ持ちあげる	最後の30秒間を抽出
第2場面	約30秒間	母親による無視の場面 (IG；Mother Affects Ignorance) 子どもが「鯨」に気づくが、母親は「鯨」や子どもの反応に気づかないふりをする	最初の30秒間を抽出
		30秒経過後、実験者は、母親のポケットにあるバイブレータを無線で振動させる	
第3場面	約1分間	視覚的共同注意場面 (JV；Joint Visual Attention) 母親が「鯨」に気づき、子どもと一緒に「鯨」を見て話題にする	最初の30秒間を抽出
		1分経過後、子どもが目をそらした瞬間に、実験者は「鯨」をバスケットの中へおろす	
第4場面	約2分間	表象的共同注意場面 (RE；Representational Joint Attention) 母親が、いなくなった「鯨」を子どもと一緒に探そうとする	最初の30秒間を抽出
		2分経過後、実験者はプレイルームのドアをノックし、入室する	
第5場面	約2分間	実験者入室場面 (EE；Experimenter Enters the Room) 実験者がプレイルームに入る	最初の30秒間を抽出
		(観察場面終了)	

無線で振動させ合図すると、母親は「鯨」に気づき、子どもと一緒に「鯨」を話題にした（第3場面/JV；Joint Visual Attention）。1分経過後、子どもが目をそらした瞬間に実験者が「鯨」をバスケットの中におろすと、母親は「鯨」がいなくなったことに気づき、いなくなった「鯨」を

子どもと一緒に探そうとした（第4場面/RE；Representational Joint Attention）。そして2分経過後、実験者がプレイルームのドアをノックし入室した（第5場面/EE；Experimenter Enters the Room）。

プレイルームでの子どもと母親の行動は、

表2 シンボル共有的共同注意場面における子どもの情動調整行動に関するカテゴリー

第1次元：身体的距離

カテゴリー	内 容
1. 母親への接近	そのインターバルで子どもが母親への身体的距離を変化させた程度。強い接近(+2)/弱い接近(+1)/接近・回避なし(0)/弱い回避(-1)/強い回避(-2)
2. 対象物への接近	そのインターバルで子どもが「鯨」への身体的距離を変化させた程度。強い接近(+2)/弱い接近(+1)/接近・回避なし(0)/弱い回避(-1)/強い回避(-2)

第2次元：表出行動

カテゴリー	下位カテゴリー	内 容
3. ポジティブまたは中性的な表出行動	3a. ポジティブまたは中性的な運動・姿勢	「小躍り」や「スキップ」のような、手足や身体全体によるポジティブまたは中性的な表出で、母親との関係を維持・促進する機能を持つ行動：あり(+1)/なし(0)
	3b. ポジティブまたは中性的な表情	笑い声を伴わない「微笑」のような顔の表情によるポジティブまたは中性的な表出で、母親との関係を維持・促進する機能を持つ行動：あり(+1)/なし(0)
	3c. ポジティブまたは中性的な発声	「笑い声」、「指示対象を持たない発声」のような音声によるポジティブまたは中性的な表出で、母親との関係を維持・促進する機能を持つ行動：あり(+1)/なし(0)
	3d. ポジティブまたは中性的な身ぶり	「ふり真似」、「指さし」のような身ぶりによるポジティブまたは中性的な表出で、母親との関係を維持・促進する機能を持つ行動：あり(+1)/なし(0)
	3e. ポジティブまたは中性的な発話	「ことば」、「歌」のような発話によるポジティブまたは中性的な表出で、母親との関係を維持・促進する機能を持つ行動：あり(+1)/なし(0)
4. ネガティブな表出行動	4a. ネガティブな運動・姿勢	「攻撃」や「凍結状態」のような手足や身体全体によるネガティブな表出で、母親の注意を喚起し関わりを引き出す機能をもつ行動、あるいは自己沈黙行動：あり(+1)/なし(0)
	4b. ネガティブな表情	泣き声を伴わない「泣き顔」のような顔の表情によるネガティブな表出で、母親の注意を喚起し関わりを引き出す機能をもつ行動：あり(+1)/なし(0)
	4c. ネガティブな発声	「泣き声」、「ぐずり」のような音声によるネガティブな表出で、母親の注意を喚起し関わりを引き出す機能をもつ行動：あり(+1)/なし(0)
	4d. ネガティブな身ぶり	「首を横に振る」のような身ぶりによるネガティブな表出で、母親の注意を喚起し関わりを引き出す機能をもつ行動：あり(+1)/なし(0)
	4e. ネガティブな発話	「ことばによる拒絶(イヤ・ダメ)」のような発話によるネガティブな表出で、母親の注意を喚起し関わりを引き出す機能をもつ行動：あり(+1)/なし(0)

2台のビデオカメラを用いて撮影した。2台のカメラの映像のうち、子どもの表情や行動がよりよく記録できるほうをリアルタイムで選択し、1本のVTRに編集した。

行動の分析

時間見本法のうち1/0サンプリング法を用いて、各場面での子どもの行動を数値化した。母親や対象物に対する子どもの行動の変化を評定する必要があることから、観察単位時間は10秒とした。数値化にあたっては、5つの観察場面から30秒ずつ、計150秒を抽出した。数値化にあたってはGusellaら⁸⁾、Mooreら¹⁴⁾、Toda & Fogel¹⁵⁾、Weinberg & Tronick⁹⁾¹⁶⁾、Weinbergら¹⁰⁾を参考にカテゴリー・システムを作成した(表2)。カテゴリーの設定にあたっては、大きく2つの次元をたてた。まず、プレイルーム内での子どもの位置の変化を示す第1次元「身体的距離」を設け、その下にカテゴリー1「母親への接近」およびカテゴリー2「対象物への接近」の2つを配置した。各カテゴリーは「強い接近」(+2)から「強い回避」(-2)までの5段階で評定した。また第2次元「表出行動」については、カテゴリー3「ポジティブまたは中性的な表出行動」およびカテゴリー4「ネガティブな表出行動」を配置し、さらに、それぞれ5つずつの下位カテゴリーを設けた。評定者は、各下位カテゴリーの定義で具体的に示された行動が見られた場合は(+1)を、見られなかった場合は(0)をスコアし、それらの合計によって「ポジティブまたは中性的な表出行動」と「ネガティブな表出行動」の強さを示すこととした。評定者間信頼性を検討するため、ランダムに抽出した8ケース(全ケースの24%)について2名のコーダーにより数値化を行ったところ、12のカテゴリーにおけるCohenの κ 係数の平均は0.73であり、これはほぼ満足できる一致率であると判断された¹⁷⁾。

Ⅲ. 結 果

1. ネガティブな情動表出の有無による子どもの数と割合

乳幼児34名の行動を数値化した結果、ポジティブまたは中性的な情動表出はすべての子ども

で見られたのに対し、ネガティブな情動を表出したのは一部のみ(67.6%)であった。そこで、ネガティブな情動表出の有無により子どもらを2群に分けた。ポジティブまたは中性的な情動表出とネガティブな情動表出の両方が見られた子ども(以下PN群と略す)は23名、ポジティブまたは中性的な情動表出のみが見られた子ども(以下PO群と略す)は11名であった。

2. 5つの場面におけるPN群の行動

PN群23名の5つの場面における平均スコアについて、反復測定による1元配置の分散分析を行った結果、母親との身体的距離に関して場面の効果が有意であった($F(2.966, 65.246) = 7.938, p < 0.001$, df はGreenhouse-Geisserの $\epsilon = 0.741$ を用いて修正)。Scheffeの法による多重比較の結果、母親による無視の場面と実験者入室場面の間($p < 0.05$)、視覚的共同注意場面と実験者入室場面の間($p < 0.001$)、表象的共同注意場面と実験者入室場面の間($p < 0.01$)に有意差があった。これらの結果により、子どもが注意を向けている対象物に母親が気づかないでいる場面、母親との視覚的共同注意場面、および、表象的共同注意場面の3場面において、PN群の子どもらは、実験者入室場面よりも母親に接近していたことが示された。さらに、これら3場面についてグラフにより細かく検討すると、母親が対象物に気づかない場面から視覚的共同注意場面にかけてグラフが右上がりとなり、その後の表象的共同注意場面では右下がりとなっていた。このことから、母親が対象物に気づいて視覚的注意を共有すると子どもは母親に接近していくこと、また、対象物が見えなくなった表象的共同注意場面では接近の度合いが低くなることがうかがわれた。また、対象物との身体的距離に関しては、場面の効果が有意であり($F(1, 22) = 4.966, p < 0.05$)、母親が対象物に気づくと、子どもの対象物に対する接近の度合いが低下したことが認められた(図1)。

情動表出行動については、ポジティブまたは中性的な情動表出行動で場面の効果が有意であった($F(4.88) = 5.523, p < 0.01$)。Scheffeの法による多重比較の結果、自由遊び場面と母親

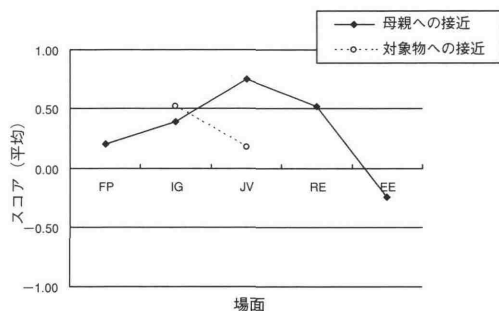


図1 PN群の5つの場面における母親への接近, および対象物への接近

注) 横軸の記号は次の5つの場面を示す。FP: 自由遊び場面, IG: 母親による無視の場面, JV: 視覚的共同注意場面, RE: 表象的共同注意場面, EE: 実験者入室場面

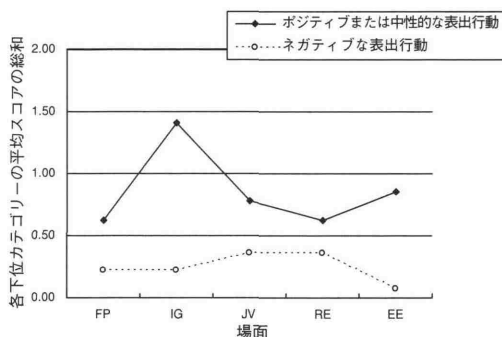


図2 PN群の5つの場面におけるポジティブまたは中性的な表出行動とネガティブな表出行動

注) 横軸の記号は次の5つの場面を示す。FP: 自由遊び場面, IG: 母親による無視の場面, JV: 視覚的共同注意場面, RE: 表象的共同注意場面, EE: 実験者入室場面

による無視の場面の間 ($p < 0.01$), 母親による無視の場面と視覚的共同注意場面の間 ($p < 0.01$), 母親による無視の場面と表象的共同注意場面の間 ($p < 0.05$) に有意差が認められた。すなわち, 子どものポジティブまたは中性的な情動表出は, 母親が対象物に気づかない場面で増加し, 母親が対象物に気づいてそれを話題にする場面では減少していた。一方, ネガティブな情動表出行動については場面の効果は有意でなかった ($\alpha = 0.05$)。グラフにより検討すると, 母親が対象物に気づかない場面から視覚的共同注意場面の間でやや右上がりとなり, その後の表象的共同注意場面にかけては横ばい, 実験者

入室場面にかけては右下がりとなっていた。このことから, ネガティブな情動表出行動は, 視覚的共同注意場面と表象的共同注意場面で増加する傾向にある一方で, 実験者入室場面では減少する傾向があることがうかがわれた (図2)。

3. 5つの場面におけるPO群の行動

PO群11名の5つの場面における平均スコアについて反復測定による1元配置の分散分析を行った結果, 母親との身体的距離・対象物との身体的距離・ポジティブまたは中性的な情動表出行動のいずれについても, 場面の効果は有意でなかった ($\alpha = 0.05$)。グラフにより検討すると, 母親との身体的距離に関しては, 自由遊び場面から母親による無視の場面にかけては折れ線が右下がりとなり, その後視覚的共同注意場面との間では右上がりとなっていた。また表象的共同注意場面から実験者入室場面にかけては右下がりとなっていた。このことから, 子どもは視覚的共同注意場面で最も母親に接近し, 実験者入室場面で最も離れる様子がうかがわれた。一方, 対象物との身体的距離については, 各場面の間に変化は認められなかった (図3)。また, ポジティブまたは中性的な情動表出について見ると, グラフの折れ線は自由遊び場面から母親による無視の場面にかけて右上がりとなった後, 視覚的共同注意場面, 表象的共同注意場面, 実験者入室場面としいに右下がりとなっていた。このことから, PO群によるポジティ

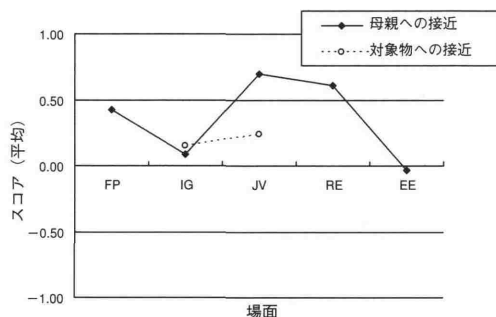


図3 PO群の5つの場面における母親への接近, および対象物への接近

注) 横軸の記号は次の5つの場面を示す。FP: 自由遊び場面, IG: 母親による無視の場面, JV: 視覚的共同注意場面, RE: 表象的共同注意場面, EE: 実験者入室場面

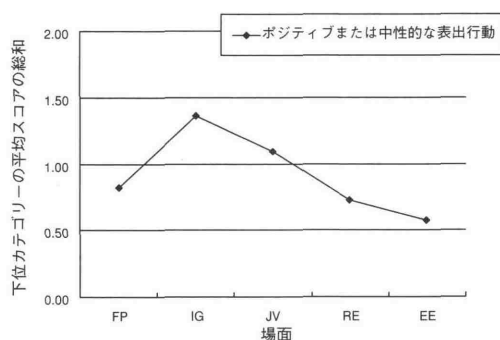


図4 PO群の5つの場面におけるポジティブまたは中性的な表出行動

注) 横軸の記号は次の5つの場面を示す。FP: 自由遊び場面, IG: 母親による無視の場面, JV: 視覚的共同注意場面, RE: 表象的共同注意場面, EE: 実験者入室場面

ブまたは中性的な情動表出は、母親が対象物に気づかない場面で最も高くなり、その後、母親が対象物に気づいて視覚的注意を共有する場面で減少した後、さらに表象的共同注意場面、実験者入室場面と減少していく傾向がうかがわれた(図4)。

IV. 考 察

1. 5つの場面で見られた子どもの情動調整行動

本研究では、ネガティブな情動表出の有無によって子どもらをPN群、PO群の2群に分けたが、どちらの群でも、場面により子どもの情動調整行動が変化する様子が見られ、特にPN群では、母親や対象物との身体的距離、およびポジティブまたは中性的な情動表出行動に対して、場面の効果が有意であった。先にあげたように、「静止した顔」研究では対面的共同注意場面において場面特異的な情動調整行動が見られるとされているが^{7)~10)}、本研究の対象となった生後1年目中期の子どもの共同注意場面でも、同様の傾向が観察されたといえる。すなわち、「子ども—養育者」という二項的な相互作用場面だけでなく、他者と意図やシンボルを共有した「子ども—対象物—養育者」という三項場面でも、子どもは自らの情動を調整しながら能動的に関与していることが示唆されたといえよう。また、先述のように、子どもは養育者との情動的絆を支えとしながら外界を探索する

と考えられており¹¹⁾¹²⁾、本研究の結果は、子どもと養育者による相補的な共同注意形態がそういった「安全基地」¹¹⁾として機能する一面をもつ可能性を示したということができよう。

2. 各群における情動調整行動の特徴

PN群では、母親が対象物に気づかない場面よりも、むしろ気づいた場面において、ネガティブな情動表出が増加する様子が観察された。さらに、対象物が見えなくなった後、母親がそれを話題にすると、ネガティブな情動表出はそれまでのレベルにとどまる一方、ポジティブまたは中性的な情動表出が減少するという傾向が認められた。先に指摘したように、母親が対象物に気づく場面でPN群の子どもらは母親に接近することが認められており、このことから、PN群は、母親による関わりが回復されたとき、母親に近づきつつネガティブな情動表出を増やすというアンビバレントな行動をとったということができる。先述のように、本研究の対象となった15~21か月という年齢期は「再接近期」¹³⁾を中心とする時期にあたるが、PN群の子どもらは、母親からの関わりが阻害されるという不安喚起場面の後、関わりが回復されても、容易に情動状態が変化せず、逆に、そのように残存するネガティブな情動を、回復された関わりの中で表出したと考えることができる。また、先にあげた「静止した顔」研究では、母親との関わりの阻害場面だけでなく回復場面でもネガティブな情動が表出されるという「持越し効果」が認められており⁹⁾¹⁰⁾、PN群における結果は、その現象との関連性をうかがわせる。アタッチメント研究でも同様に、母親との分離の後、再開が回復されても不安が解消されにくいアンビバレント群の存在が知られており¹²⁾、PN群の行動との共通性が認められるということができよう。

一方、PO群については、母親との身体的距離・対象物との身体的距離のいずれも、場面によって変化する様子は認められたものの、その効果は有意でなかった。このことは、母親との関わりが変化しても、子どもの行動が影響を受けにくいという点で、アタッチメント・タイプにおける回避群¹²⁾との類似性がうかがわれる。

また、両方の情動に対する場面の効果が有意でなく全体に情動表出が少なかったという結果も、この類似性を支持すると考えることができる。

3. 本研究の問題点と今後の課題

本研究の問題点および今後の課題として、以下の3点をあげることができる。第1に、共同注意場面における子どもの情動調整行動をタイプとして検討するという視点が考えられる。本研究ではネガティブな情動を表出する子どもとそうでない子どもが見られたが、その違いはタイプとして取り出すことが可能だろうか。先に検討したように、アタッチメント・タイプにおけるアンビバレント群とPN群、回避群とPO群については、その関連性が見出される可能性がある。第2には、発達の視点を考えることができる。本研究は横断的方法によったが、数か月の間隔をおいた縦断的観察を用いれば、発達の検討と同時に、個人差についても検討できる可能性がある。第3に、養育者の関わり行動と関連づけて子どもの行動を分析する視点が考えられる。本研究では子どもの行動をコード化することにより検討を行ったが、子どもだけでなく母親の行動もあわせてコード化することにより、2者の相互作用のなかで子どもの情動調整行動がどう生起しているのか、具体的に記述、検討することが可能となると考えられる。

冒頭にも述べたように、共同注意は、子どもが外界と関わり他者との間で意味世界を共有していくための重要な発達の足がかりとなると考えられている。今後、これらの課題に継続的にとりくんでいくことで、子どもの共同注意とそこの情動調整がどのような発達の役割を果たしているのか、より詳細に明らかにされていくことが期待される。

謝 辞

本論文は、2000年度～2004年度文部科学省科学研究費（課題番号：12871021／14510170 研究代表者：大藪 泰）から補助金を受けて行われたものです。

文 献

- 1) Butterworth, G. E., & Cochran, E. 1980 Towards a mechanism of joint visual attention in human infancy. *International Journal of Behavioral Development*, 3, 253-272.
- 2) Adamson, L. B. 1996 *Communication development during infancy*. CO : Westview Press. (大藪 泰・田中みどり訳 1999 乳児のコミュニケーション発達 ことばが獲得されるまで 川島書店).
- 3) 大藪 泰. 2004 共同注意 新生児から2歳6か月までの発達過程 川島書店.
- 4) Cole, P. M., Martin, S. E., & Dennis, T. A. 2004 Emotion regulation as a scientific construct: Methodological challenges and directions for child development research. *Child Development*, 75, 317-333.
- 5) Adamson, L. B., & Russell, C. L. 1999 Emotion regulation and the emergence of joint attention. In P. Rochat (Ed.), *Early social cognition : Understanding others in the first months of life*. NJ : Laurence Erlbaum Associates.
- 6) 東谷知佐子 2004 共同注意と情動 大藪 泰・田中みどり・伊藤英夫（編）共同注意の発達と臨床 川島書店
- 7) Cohn, J. F., & Tronick, E. Z. 1982 Communicative rules and the sequential structure of infant behavior during normal and depressed interaction. In E. Z. Tronick (Ed.), *Social interchange in infancy : Affect, cognition, and communication*. Baltimore: University Park Press.
- 8) Gusella, J. L., Muir, D., & Tronick, E. Z. 1988 The effect of manipulating maternal behavior during an interaction in 3-and 6-months-olds' affect and attention. *Child Development*, 59, 1111-1124.
- 9) Weinberg, M. K., and Tronick, E. Z., 1996, Infant Affective Reactions to the Resumption of Maternal Interaction after the Still-Face. *Child Development*, 67, 905-914.
- 10) Weinberg, M. K., Tronick, E. Z., Cohn, J. F., & Olson, K. L. 1999 Gender differences in emotional expressivity and self-regulation during early infancy. *Developmental Psychology*, 35, 175-188.
- 11) Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss : Vol.1 Attachment*. NY : Basic Books. (黒田実郎・大羽

- 薬・岡田洋子訳 1976 母子関係の理論 I 愛着行動 岩崎学術出版社)
- 12) Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E. and Wall, A., 1978, Patterns of Attachment. New Jersey : Lawrence Erlbaum Associates.
- 13) Mahler, M. S., Pine, F., and Bergman, A. 1975 The Psychological Birth of the Human Infant. New York: Basic Books. (高橋雅士・織田正美・浜畑紀 訳 1981 乳幼児の心理的誕生 黎明書房).
- 14) Moore, G. A., Cohn, J. F., & Campbell, S. B. 2001 Infant affective response to mother's still-face at 6 months differentially predict externalizing and internalizing behaviors at 18 months. *Developmental Psychology*, 37, 706-714.
- 15) Toda, S., & Fogel, A. 1993 Infant response to the still-face situation at 3 and 6 months. *Developmental Psychology*, 29, 532-538.
- 16) Weinberg, M. K., and Tronick, E. Z., 1994, Beyond the Face: An Empirical Study of Infant Affective Configurations of Facial, Vocal, Gestural, and Regulatory Behaviors. *Child Development*, 65, 1503-1515.
- 17) 中澤 潤, 大野木裕明・南 博文 (編著) 1997 心理学マニュアル 観察法 北大路書房.